

市来の七夕踊

【所 在 地】いちき串木野市大里（七夕踊保存会）

【種 別】国指定重要無形民俗文化財

【指定年月日】昭和 56 年 1 月 21 日



この芸能は、市来町大里集落の七夕の日に行われる風流の踊りである。

芸能次第としては、まず、前踊りとして作り物の鹿、虎、牛、鶴などの大張子や琉球王、大名、薙刀踊などの一行が列をなし、次に本踊りとしての太鼓や鉦を持った太鼓踊が続き、次いで後踊りとして薙刀踊が続く。この変装仮装した者たちの行列の群行は、芸能演出法としてたぐい稀な特色ある形であり、大里集落の多数の者が何らかの役割を担って参加する規模の大きなもので、現在は 300～400 人が参加する。

この芸能の中心は、太鼓・鉦で編成する太鼓踊りにあり、古風な歌詞にのって青年と子どもの総勢 30 余名によって演じられる。青年の踊り手はヤッサ（役者）とも呼ばれ、一番ドン、二番ドン、イデコ（入れ鼓）ヒキ、平太鼓などの役に分かれ、子どもの踊り手はカネウチ、イデコといった役に分かれる。このように太鼓踊が前踊り、後踊りをともなった形で演じられるのはきわめて稀で特色がある。

この踊りの由来としては、一説には島津義弘の文禄・慶長の役の凱旋の祝賀芸能だったといわれ、踊り一行各役の扮装には丸に十の字の島津氏の紋がつけられる。また他の説では、集落の水田を開拓した床濤 到住を供養するために行われるのだとの伝承もある。一方、作り物は動物の精霊を示すものと考えられることなどから、これは七夕の日の踊りとはいえ、亡き靈を供養する盆行事の前祭りの性格もうかがわれ、注目すべきものである。